

・テレスコープを働かし、多くの中間質量の粒子を“発見”し、これを varitron と名づけた。この結果はソ連の国家主義に乗って宣伝され、イデオロギーによる偏見が原因しているのではないかとささやかれていた。Blackett も左翼的として知られていたので、手紙にあるようなイデオロギーの話が出たのである。

ただし、これには後日談がある。Blackett のグループが霧箱を山に持ち上げたところ、たくさんの V 粒子が見つかった。地上では V 粒子をつくる核成分が弱かったからである。またソ連では Dobrotin が Alikhanian 等と似た条件で実験し、磁石面で散乱された粒子がにせの Varitron をつくることを示した。

最後の spray は、一時さわがれただけで、その名の如く霧消してしまった。カスケード・シャワーのしっぽというのが正しい解釈であろう。そんな解釈を論文にした人もなく、Oppenheimer 氏が 1 人だけさわいでいたのである。

上の論文 (5.3 ~ 4 (本号 p. 217 ~) とその解説) (2.3 (本号 p. 175)) と海外通信 (5.14 (本号 p. 283) および 5.21 (本号 p. 293)) は、今の素粒子論研究者には係りのないことであろう。しかし、生れ行く過程であらでもないこうでもない議論が交わされ、次第に物理的内容がはっきりしてくる。朝永先生がこの過程を大切にされた様子が海外通信からうかがわれるであろう。

3.5 「朝永→伊藤 ; 11 月 1 日」について

埼玉大・理工 伊藤 大介

プリンストン滞在中の朝永先生から、素研に掲載されている 11 月 1 日付お手紙をいただいたのは、先生がアメリカへ発たれる少しまえ「物理的には中性ベクトル中間子論で質量 $\kappa \rightarrow 0$ にすれば、当然光子の理論になるはずだが、場の交換関係に $1/\kappa^2$ が現われ、簡単に $\kappa \rightarrow 0$ にはできない。(お前これを考えよ)」というお話をされたことに関係します。先生がアメリカへ行かれ日が経つうちに、この宿題のこともつい忘れていた或日、突然このお手紙を載き、大目玉を頂戴したように、縮み上ったのを昨日のことのようにおぼえています。おまけに大きなボール箱に一杯、罐詰だのコーヒーだの、漫画の絵本まで送っていただき、暮か正月、みんなで頂戴し、吉村徹君が飲みすぎで伸びてしまったのもこのときではなかったかと思いい出しています。